

～ボストン歴史探訪～ その2
レキシントン・コンコードの戦い



～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

二回目のボストン歴史探訪は、レキシントンとコンコードを取り上げます。

ポール・リビアの「真夜中の疾駆」は、『レキシントン・コンコードの戦い』へと続きます。「真夜中のメッセージは永遠に響き続ける」のですが、当のリビアはその後、どうなってしまったのでしょうか？

彼は、捕まってしまいました。コンコードを前にして。ロングフェローの詩では、午前2時には、コンコード橋に到達していますが、このあたりは、実際にコンコードに辿り着いたプレスコットや、ドーズについての史実を盛り込んだ詩的世界の空想ということなのでしょう。

捕まってしまったポール・リビア・・・馬を没収されただけで、無事に解放されたとのこと。戦とはいえ、おおらかな時代であったことがうかがえます。

ともあれ、リビアらの報告により、『ハンコック・クラーク邸』にいた「ジョン・ハンコック」や「サミュエル・アダムズ」は難を逃れます。この時、英国軍に捕まっていたら歴史が変わっていたのでしょうか。少なくとも、サミュエル・アダムズのビールが飲まれることはなかったでしょう。

そして、『バックマンタバーン』に集まっていた77人のミニットマンは、英国軍を迎え撃つべく『レキシントン・バトル・グリーン』に陣取ります。

1775年4月19日早朝、植民地側77人のミニットマンと700人の英国軍の対峙となり、植民地側の隊長が撤退を命じようとした矢先に血の気の多いミニットマンが発砲してしまい、戦闘が始まります。この戦闘で使用された「マスケット銃」を博物館で見ることができるのですが、その大きさに圧倒されます。植民地側が予想以上に奮戦したとのことですが、8名のミニットマンが亡くなられ、英国軍側の犠牲者と共にバトルグリーンに今も眠っています。

「ミニットマン」という、特異な名前ですが、「招集されたらライフルを持って1分で駆けつける男 (minute man)」という意味が込められています。子供の頃から狩猟に親しみ、銃の扱いに熟練していた移民が大半を占めており、狙撃・ゲリラ戦に優れていたようです。

アメリカの独立は「パトリオット (愛国者)」と「ミニットマン」によって達成されたと言われます。一方、現代では、「パトリオット」は広域防空用の地対空ミサイルのことであり、「ミニットマン」は大陸間弾道ミサイルの呼称です。アメリカ人が自国の歴史の英雄の

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

存在とミサイルの呼称を心の中でどのように整理しているのか興味の湧く事実です。

レキシントンのビジターセンターで、手書きの日本語の資料を頂きました。レキシントンにお住まいの黒澤敏夫御夫妻が作成されたものです。ビジターセンターには他にも、多数の言語の資料が用意されているようでした。そして、この資料と「コンコード博物館」が、前回取り上げた「真夜中の疾駆」に登場した「海路？」の謎を解いてくれました。

ミニットマンの抵抗を受けた英国軍は隊を再編成してコンコードに向かいます。コンコードの「オールドノース橋」で両軍激突、「全世界に響き渡った発砲 “The shot heard around the world”」という事になるのですが、発砲自体はレキシントンの血の気の多いミニットマンが既に行っていた訳です。これが、その後8年に渡るアメリカ独立戦争の始まりです。

「コンコード博物館」は、設備が新しくお勧めです。ポール・リビアが確認したという、オールドノース協会に掲げられたランタンも展示されています。是非、「真夜中の疾駆」を読んで、こちらに立ち寄ってみてください。

「海路？」の謎についてです。「コンコード博物館」の2階にある大きなスクリーンモニターに当時のボストン、レキシントン、コンコードを含む地図が示されています。それを前にした総領事館館員3名と博物館学芸員の会話です。（日本語訳には一部方言が含まれています。）

館員A：「海路で来る英国軍ってどこから来るんだよ？」

館員B：（ボストン沖合、英国方面の海を指して）「こっちから。」

館員A：「違うよ。英国軍はもうボストンに待機しているんだよ。」

館員C：「すみません。学芸員の方が教えてください。」

学芸員：「モニターがその疑問を解説しますので、先ずはご覧ください。」

ということで、モニターに音声解説付きで、1775年当時の様子が流れます。

輝くランタン 疾駆するリビアとドーズ

（ボストンコモン辺りから光が膨れあがり）動き出す英国軍

チャールズ川を渡り、進軍する英国軍

リビアとドーズを引き継ぎ、コンコードに向かうプレスコット

レキシントンに迫る英国軍

レキシントン・バトル・グリーンでの戦い

コンコードでの激突

この間、モニター横には英国軍と植民地軍の兵力を示す棒グラフが表示され、一旦は援軍の

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

参戦により植民地軍を数の上で上回る英国軍ですが、各方面から植民地軍が加わって圧倒的な数となり、英国軍をボストンに敗走させてゆく模様が示されていました。

学芸員：「この地図のように、詩の中では、当時のチャールズ川を **Sea** と表現しているのですよ。」

「海路？」の謎は、海ではなく、チャールズ川であったと解明されました。

最後に、英文の資料を翻訳した黒澤敏夫御夫妻による、英国軍がチャールズ川を渡る様子の一節です。

『英国軍の目的は彼等（植民地の人々）の反乱を見越して愛国者達が蓄えた軍需物品を破壊することにあった。英国軍士たちは軍曹に起こされ兵舎を出て静かにチャールズ川のほとりへと移動した。そしてそこからボートに乗ってリッチミアの近くのケンブリッジ岸に上陸した。この移動は整然とは行われずまた満潮にあったため兵士達は冷たい水の中を徒歩で上陸しなければならなかった。さらにまたウィルスクリークへ逆流してきた水の中を渡ったためずぶ濡れになった。19日2時頃、彼等はレキシントン、コンコードへ向けて進撃を開始した。』

深夜、濡れ鼠となって進軍し、祖国から遠い植民地で命を落としていく英国軍兵士を思うと、いつの世も変わらぬ戦争の悲惨さが身にしみます。場所も特定され、アメリカ独立戦争が身近になってきました。

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

今回は、ボストン市内から車で約 30 分のレキシントンとコンコードに実際に赴き、当時の愛国者らと関わりの深い歴史的な建造物や博物館をご紹介します。

1. Paul Revere Capture Site :

ポール・リビアが捕獲された場所です。

レキシントンからコンコードに向かい始めた、ポール・リビアとウィリアム・ドーズ、サミュエル・プレスコットは、ボストンからの馬を走らせる人々に事情聴取をしていた英国軍に足止めされました。ドーズは隅の家々に警告をしていたため、英国軍の気配に気づき、方向を変え逃げることができました。プレスコットとリビアは共にいたのですが、プレスコットが「散れ！！」と突然叫び、二人は別々の方向に逃げました。プレスコットはコンコード出身であったため、土地勘があり、英国軍から逃げ切ることができ、無事にコンコードのミニットマンたちにも英国軍の進軍を警告することに成功しました。一方でリビアは、誤った方角に走ってしまい、その先にいた別の英国軍に再び捕まってしまいます。しばらくの間、質問や脅迫にあったリビアは、最終的に馬を取り上げられた上で、解放されました。その後、徒歩でサミュエル・アダムズとジョン・ハンコックのいる場所へと戻っていったのでした。



(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

2. Munroe Tavern :

約 1690 年建設。植民地軍の兵士であったウィリアム・モンローが開いていた居酒屋。1775 年 4 月 19 日の午後、英国軍に占拠され、英国軍のための病院と一時的な本部が置かれていました。14 年後の 1789 年、ワシントン大統領がレキシントンの戦跡地を視察に来た際、この居酒屋で食事をしたことでも有名です。

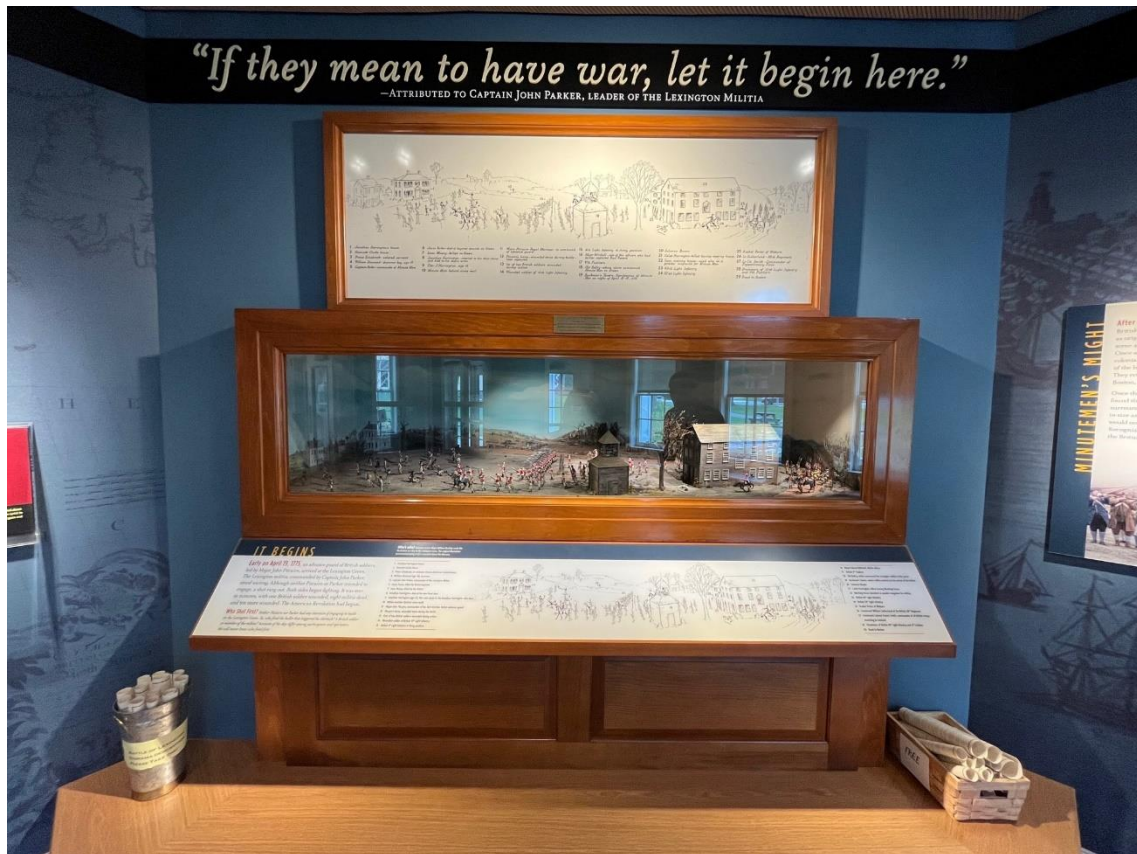


(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

3. Lexington Battle Green :

1775年4月19日の朝、77人のミニットマンが初めて英国軍に対面し、ジョージ・ワシントンの日記の中で“英国との紛争で初めて血が流れた”と謳われる場所。アメリカの国定歴史建造物であるとともに、戦争によって血の流れた場所、ミニットマンたちが埋葬されている場所という二つの意味を持つ聖なる土地としても考慮されています。



Lexington Visitor Center (2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

① Minutemen Statue :

ボストン出身の彫刻家、ヘンリー・キットソンが制作した等身大の銅像。この銅像のモチーフとなったのは、1775 年にレキシントン民兵のリーダーであったジョン・パーカーではないかと考えられています。彼は、英国軍が進行してきた方向を向いて立っています。独立戦争から 125 周年を記念して 1900 年 4 月 19 日に初披露されました。



(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

② Preacher's Stand :

当時、集会議場が置かれていた場所で、1775年4月19日、英国軍の大砲によって破壊されてしまいました。今は、その跡地に、説教壇が設置されています。



(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

③ Flagpole :

1965 年、アメリカ合衆国議会によって、毎日 24 時間、国旗を掲げ続けることを認められている場所です。アメリカ国内には、全国で 8 カ所しかありません。200 年を記念した 1975 年、落雷によって衝撃を受けた木製のポールを、市民自らが資金を集め、今のポールに取り換えました。



(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

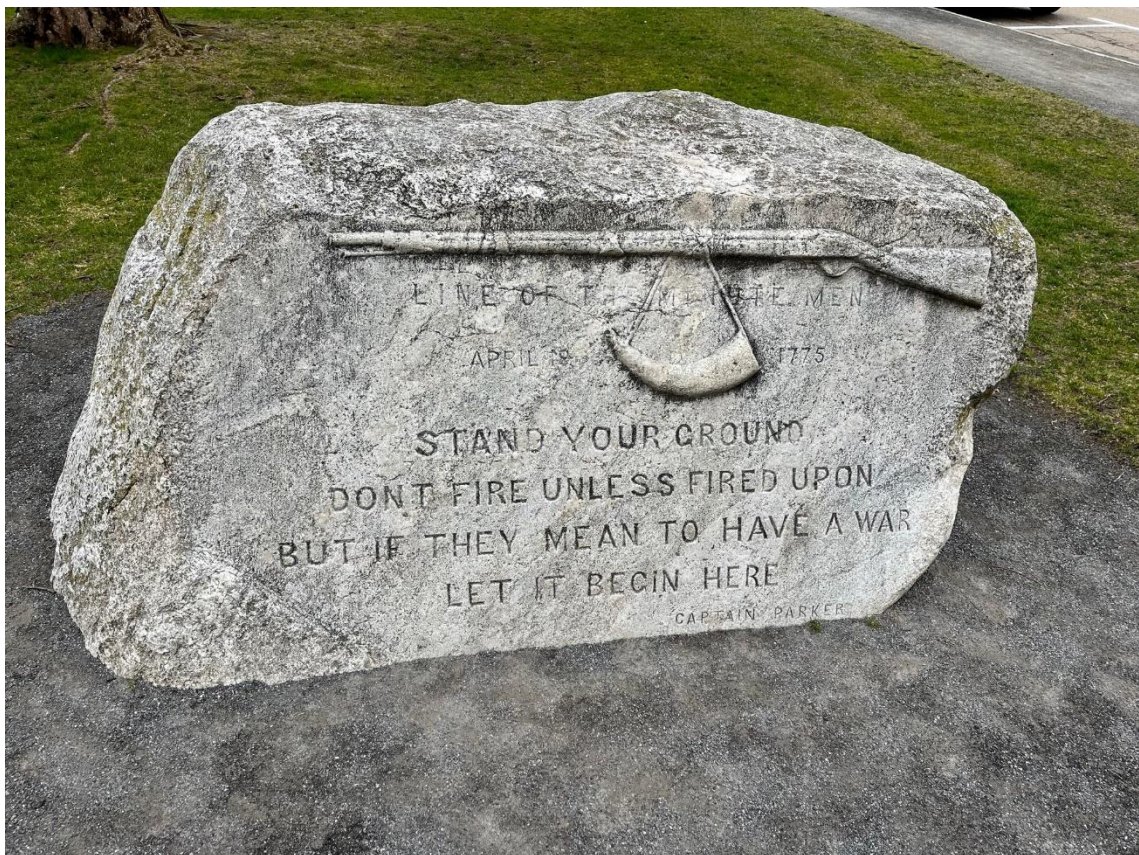
④ Parker Boulder :

レキシントン出身でミニットマンのリーダーであった、ジョン・パーカーの有名な名言がこの石像に刻まれています。

“Stand your ground. Don’t fire unless fired upon. But if they mean to have a war, let it begin here.”

「位置につけ。撃たれるまで撃つな。でも、英国軍が戦争をするというのなら、ここで始めよう。」

彼は、ミニットマンたちに巧みに指示を送り、英国軍に立ち向かっていったのです。この時代でもなお、誰が最初に銃を撃ったのかは解明されていません。



(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

⑤ Revolutionary War Monument :

アメリカ合衆国の中で、最古の戦争記念碑の一つ。4月19日の戦いで、犠牲になった7名の兵士が眠っています。Ye Olde Burying Ground から、1835年にこの場所へと移動されました。



(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

⑥ The Belfry :

1761年今と同じ丘の上に建てられ、1768年にバトルグリーンに移動されました。1775年4月19日、この鐘楼の鐘が、英国軍進軍の警告を鳴り響かせました。1797年にはさらに別の場所に移動され、1891年に、最初に建てられていた丘の上に再び移動されました。強風によって破壊されてしまったため、今現在の姿は1910年に再建されたものとなっています。



(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

⑦ Buckman Tavern :

戦いの本部となった場所。4月18日の夜、77人のミニットマンたちがここに集まり、英国軍を迎え撃つための準備をしました。開戦後は、多くの負傷兵たちの病院の役割を果たしました。1710年に建設された居酒屋でありましたが、1920年代に、復元されてからは、その時代を想起させる展示物のある場所として今も残っています。



(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

⑧ First Parish Church :

Preacher's Stand が英国軍によって破壊されてしまったため、新たな集会議場として建設されました。



(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

⑨ Ye Olde Burying Ground :

レキシントンでは最古の 1690 年からある墓地。First Parish Church のすぐ裏側にあります。独立戦争や南北戦争に従事した兵士や退役軍人らが埋葬されていると共に、4 月 19 日の戦いから三日後になくなった英国軍兵士らも埋葬されています。



(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

⑩ Memorial to the Lexington Minute Men of 1775 :

1775年4月19日に、レキシントン・バトル・グリーンにて戦いに挑んだミニットマンを偲ぶ記念碑。この石像の裏には、ミニットマンとしてバトルグリーンで英国軍と戦った兵士たちの名前が刻まれています。



(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

4. Hancock-Clarke House :

約 1698 年建設。ジョン・ハンコックとジョナス・クラークが住んでいました。1775 年 4 月 18 日、サミュエル・アダムズと共に、この家にいたところ、ポール・リビアらが英国軍の進軍を警告するために訪れたことで知られています。リビアの到着から 30 分後にウィリアム・ドーズも到着し、二人はこの家で、コンコードに向けて支度を整えていきました。



(2022/4/14 撮影)

サミュエル・アダムズ：裕福な商人の家庭に生まれ、アメリカ合衆国の指導者、政治家、著作家、政治哲学者として活躍し、アメリカ合衆国建国の父の一人となりました。英国の植民地支配に反抗する植民地軍の中心的人物として、特に、英国による税制に対し異議を訴え、ボストン茶会事件を主導するなど、アメリカ独立へ大きく貢献しました。ボストン発祥のビールにはサミュエル・アダムズという銘柄もあります。名前の由来は、アダムズの独立のための戦いと、夢や幸せを追求する全てのアメリカ人に与えられた権利を追求する姿勢に創業者が共感をしたからだそうです。このように彼の功績は、今でも多くの人々の記憶に刻まれています。

ジョン・ハンコック：牧師の息子として生まれ、ハーバード大学を卒業後、叔父の後を継ぎ貿易商となりました。その後、アメリカ合衆国の政治家となり、植民地軍のリーダー的存在

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

在として活動しました。第二次大陸会議および連合会議の議長を務め、マサチューセッツ州の初代知事でもありました。アメリカ独立宣言に最初に署名し、その署名の際、非常に大きく太い字であったため、今でも、大きくわかりやすい字で署名することを“ジョン・ハンコックと書け”と表現されることがあるようです。ボストンにある 62 階、約 241m にも及ぶ、ニューイングランド地方最高層のビルはかつて、ジョンハンコックタワーと言われていました。彼の名もこのようにして、後世まで語られ続けることでしょう。

5. Old North Bridge :

1775 年 4 月 19 日の朝、英国軍とアメリカ植民地軍が衝突し、"Shot heard round the world"という言葉と共に語られている、アメリカ独立戦争が開始した場所の一つです。この橋の上での戦いは一瞬で終わったものの、英国軍約 1700 人と植民地軍約 4000 人を含んだ、ボストンからコンコードの 16 マイルにも及ぶ、大規模な戦いの始まりとして記録されています。

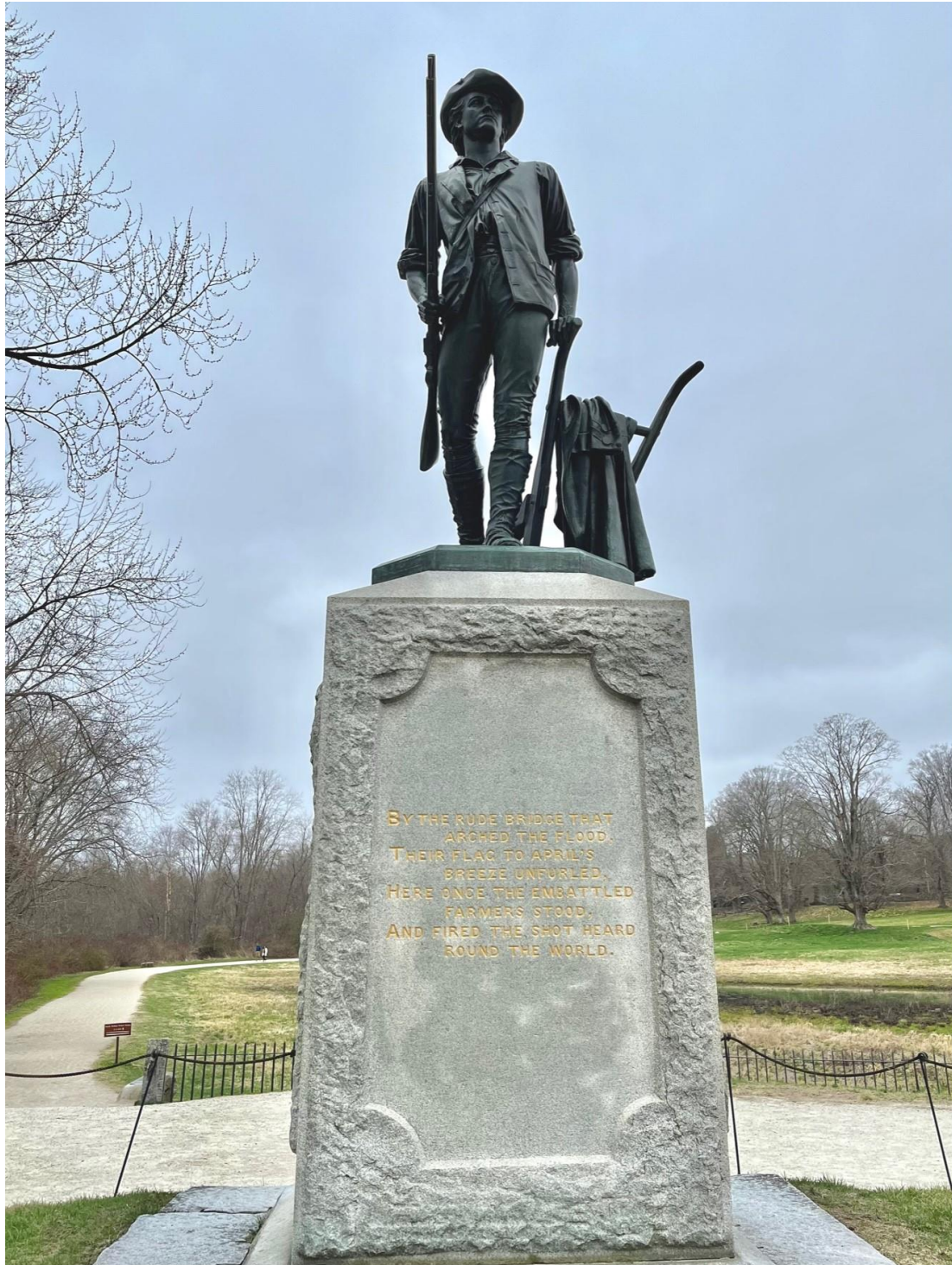


(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

① Minute Man Statue :

植民地に特徴的な鋤とマスケット銃を手に持ち、当時のミニットマンたちと同じ方角を向いて立っています。



(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

② Grave of British Soldiers at the North Bridge :

ノースブリッジでの戦いで命を落とした、英国軍第四連隊に所属していた三人が埋葬されています。



(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い

6. Concord Museum :

コンコードの歴史に関係しているものが数々展示されている博物館。ポール・リビアが真夜中の疾駆で掲げたランタンも展示されています。コンコード博物館の公式 HP では 1775 年 4 月 19 日に関する展示物をバーチャルで楽しむこともできます。



(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い



右：火薬を入れるホルン 左：マスカット銃 (2022/4/14 撮影)

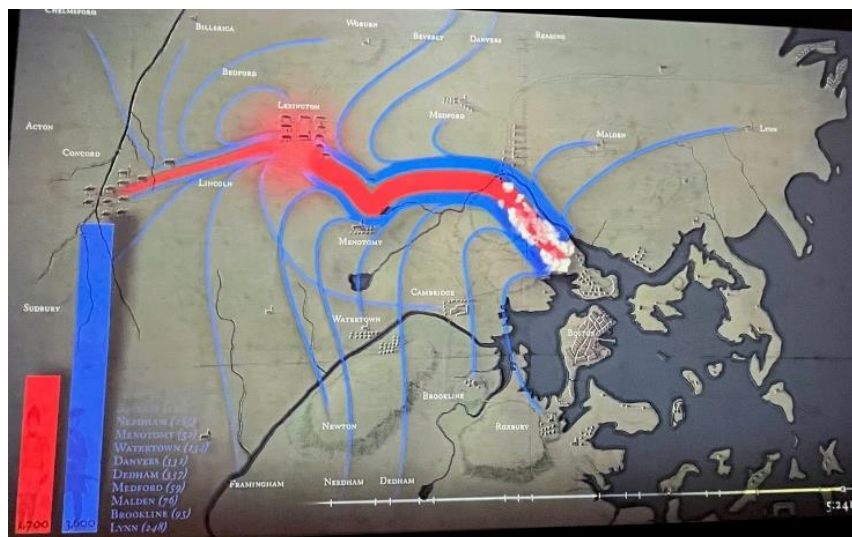


ポール・リビアの真夜中の疾駆に登場するランタン (2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い



～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い



独立戦争の始まりの植民地軍 VS 英国軍の動きを大きなスクリーンで学ぶことができます。

(2022/4/14 撮影)

～ボストン歴史探訪～ その2 レキシントン・コンコードの戦い



ポール・リビアの真夜中の疾駆の物語が壁一面にイラストと共に紹介されています。

(2022/4/14 撮影)

詩を読んで、翻訳し、そのままの語意を理解するだけでなく、実際の場所に赴くことで、あらたな発見や理解に繋げることができました。ぜひ、皆様もお時間のある際に、レキシントン・コンコードで歴史探訪をしてみてはいかがでしょうか。

出典：

1) VISIT LEXINGTON MASSACHUSETTS “Attractions: Historic Sites”

<https://www.tourlexington.us/attractions> (2022/4/6 閲覧)

2) Lexington Historical Society “Buckman Tavern”

<https://www.lexingtonhistory.org/buckman-tavern> (2022/4/6 閲覧)

3) National Park Service U.S. Department of the Interior “Paul Revere Capture Site”

<https://www.nps.gov/places/paul-revere-capture-site.htm> (2022/4/7 閲覧)

4) Concord Museum (2022)

<https://concordmuseum.org/> (2022/4/7 閲覧)

5) Samuel Adams “Our Story” (2022)

<https://www.samueladams.com/~link.aspx?id=7D23DA2B53AA42B58FA6A49C2E343C58&z=z>
(2022/4/11 閲覧)

6) BIOGRAPHY “The Real Story of Paul Revere’s Ride” (2019/4/19)

<https://www.biography.com/news/paul-reveres-ride-facts> (2022/4/11 閲覧)